The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	シェリングにおける自然と芸術 : カントとの関連において
Author(s)	岡林, 洋
Citation	待兼山論叢. 美学篇. 1980, 14, p. 13-34
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48109
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

シェリングにおける自然と芸術

——カントとの関連において——

岡　林　　洋

カントの批判哲学は理論と実践、自然と自由との二元論である。彼の考えていた自然は、経験的に認識可能な限りでの自然であり、現象的自然に限定される。その際現象的自然の背後に存する物自体は、不可知なものとして残される。この自然と自由、そして現象と物自体の二元的立場を、フィヒテはカントの実践理性の優位に根差す道徳的厳格主義Rigorismusの立場から克服しようと試みたのである。フィヒテにおいて自然は，自我の自発的活動を制限すると同時に自我によって克服される非我として，観念化，主観化されている。シャスラーによれば，このフィヒテの主観的観念論からFr.シュレーゲルのロマン主義が生れたのであるという。(1) フィヒテの哲学原理は，その倫理的傾向からして美学の体系をその上に打ち建てるには適さなかったが，初期ロマン派の芸術観の展開に対して実に大きな影響を与えたのである。

Fr.シュレーゲルはフィヒテの自我の哲学をもって精神史の新しい時代の始まりとみなしている。ロマンティカーにとってフィヒテの「自我」理念は，彼らの芸術的主張つまり無限性及び活動性或は生成の理念の理論的把握のための啓示であった。Fr.シュレーゲルは，非我（客体）を措定するフィヒテの所謂「産出的構想力」を芸術創造における想像力Phantasieと同一視し，ロマン的詩情とフィヒテの観念論とに内容的同一性を認めている。実際シュレーゲルのロマン的天才は，おのれの天才的自我の外には，

それ自体存在するいかなるものをも認めない。それはまさに外的世界に対してイローニッシュに関係するのである。こうしたシュレーゲルのイロニー的立場は，フィヒテの学説から容易に推論し得る帰結であり，またこの時期における彼のフィヒテ的主観主義の絶頂を示すものであるといわれている。(2)

しかしシュレーゲルはフィヒテの体系に，ある種の不満を感じていた。それは，その道徳的厳格主義から帰結するフィヒテの自然に対する否定的な把握の仕方であった。フィヒテにとって自然（＝非我）は無限に発展を続ける精神（＝自我）を先ず抑制し制限する。次に自我はこの自然を克服しなければならない。この場合自然は自我の目的実現の単なる素材となる。ところがシュレーゲルやノヴァーリスらのロマン主義者にとって，自然と精神とは生成する根源的宇宙そのものに帰入すべきものである。シュレーゲルによれば自然を超越するとは，所産としての自然の背後の霊活的自然つまり神性の表現としての自然に帰還することなのである。(3) やがてロマン派はフィヒテ哲学を去り，これに代わる理論的裏付けをシェリングの自然哲学の中に求めて行くようになる。

ところがシェリングによる最初期の自然哲学的著作『自然哲学の理念』(1797年) Ideen zu einer Philosophie der Natur. に対するロマン派の態度は，我々の予想に反して否定的なものであった。ノヴァーリスは当初この著作に好奇心をもって接し，これに大いに共感を示したのであるが，Fr. シュレーゲルはそれを「通俗性」の故に「駄目な書物」だと断定した。そうした彼の影響でか，ノヴァーリスもまたシェリングのこの論文に対して懐疑的な態度をとるようになった。(4) 何故に当初シェリングの自然哲学がロマン派によって拒絶されたのであろうか。

1．自然哲学の成立

1791年以来のカント研究の結果，カントの哲学体系には最後の基礎付け

が欠落していることを洞察したシェリングは，統一的立場からの基礎付けをフィヒテにならって無制約的自我のうちに求めた。その限りにおいてシェリングとフィヒテは共通の基盤の上に立っており，前者は後者の良き理解者であり，祖述者であったといえる。しかしまた既にこの発端において，シェリングは後年の実在＝観念論，観念＝実在論の観点に立っていたのである。即ちシェリングの初期『自然哲学』は，フィヒテ哲学において等閑視されていた実在的，客観的側面を補足すると共に，主観的（自我）哲学と対をなすべき意図をもって提起されたものなのである。

『自然哲学の理念』におけるシェリングの基本姿勢は，経験Empirieに対する偏見のない率直さである。性急な一般化を許さず，形而上学的思弁哲学に対して尖鋭的な懐疑をもっていた当時のシェリングは，自然の哲学的体系化においてもまた，その理論が常に自然科学的経験に裏打ちされなければならないと考えていた。哲学は実証的科学に，観念は実在に，概念は経験によって補われるべきなのである。この点をロマンティカーは「通俗的」とみなしたのである。実際シェリングは，いわば上から（原理をたてて）ではなく，下から（経験並びにこれまでの体系の吟味から）考察を始めている(以下コッタ版の全集による，Ⅱ，56)。彼によれば物質（＝無機的自然）には積極的な力と消極的な力との二元性Duplizität或は両極性Polaritätがみられる。物質の最も低い段階を牽引力Attraktionと反発力Repulsionという二元的力学的原理が形成する。さらに観念的なものの量が次第に増すに従って重力Schwerkraftと光Licht，磁力Magnetismusと電気Elektrizitätさらに化学的元素間の親和性と不親和性等が現われる（vgl. Ⅱ，76ff.)。しかし磁気の両極が引き合うように，相反する力は必然的に釣合い，二元的対立が次々に解かれ自然は発展する。既に自然の無機的所産における力学的発展性の考えの根底には，有機的組織化の原理が自然の形成力として前提されているのである。シェリングにとって有機体

Organismusとは，精神との関係においてのみ表象される実在的自然における最高の観念的存在なのである。こうして自然は，もはや自我と相容れぬ異質的存在（＝非我）ではなく，かえって自我と同質的な生命現象とみてとられるのである。このような自然理解にシェリングを導いたのが，彼のカント研究であった。シェリングが自らの自然哲学研究に際して準拠したといわれているのは『判断力批判』第二部，特にそのOrganismusに関する学説である。(5)

1）カントのOrganismus理解

カントは有機体Organismusをどのように考えていたのであろうか。彼にとって有機体とは，その各々の部分（＝Organ）が一つの原理によって統一せられて成立する全体（＝Organismus）を意味する。その各部分は，全体に対して内面的な必然的関係を有する。しかも全体を統一する原理は，外から与えられずにそれ自らの中に存する。それ故部分は全体に対して必然的にして，あたかもals ob自由の所産であるかのように，自ずからおのれの目的（＝Organismus）に適うのである。したがって有機体には内面的合目的性innere Zweckmäßigkeitが認められる。こうした有機的な自然の所産が，自然目的として『判断力批判』の中で扱われたことは注目に値する。(6)

有機体は，一面，自然の所産としてニュートン的物理法則により説明される面をもつが，他面，その固有の発生，成長，諸部分間の相互依存性に関して，もはや機械因果nexus effectivusをもっては規定し尽されない。むしろそれはただ目的因果nexus finalisによってのみ判定され得るのである。なぜなら生命にかかわる内部構造を有する自然の所産の産出を説くために，我々は結果として経験に与えられているその所産そのものを，その所産の原因としてその根底に置かねばならぬからである。我々が自然の

所産Naturproduktとして認識するものを，それにもかかわらず目的Zweckとして判定しようとする場合，それは自然目的Naturzweckと考えられる（Kritik der Urteilskraft, § 64）。

しかも有機体には，カントが述べているように《目的因果による結果》に《作用因果の連結》つまり諸部分（＝Organ）間の生産的統一が同時に加わる。つまり有機体の全体にあっては，その各部分が「他の諸部分を（したがってあらゆる部分が他の諸部分を相互に）産出するOrgan機関」（K. d. U., § 65）の役目を果すのである。したがってこうした産出的Organは，内的作用因果をもたぬ「技術の道具」ではなく，かえって自己自身の内に自己を繁殖させ，形成する力をもつ「自然の道具」と呼ばれるべきである。こうした意味で有機的存在は「有機化され同時に自らを有機化する存在として自然目的と呼ばれるのである」（K. d. U., § 65）。

以上明らかなように，なるほど有機体には全体がただちに部分を規定する事態がみられる。しかしこうした有機体を客観的に認識し得るためには，我々は全体から部分を直接導出する直覚的悟性intuitiver Verstandをもたなければならないのである（K. d. U., § 77）。しかし言うまでもなくそうした悟性の存在は，カントの有限的立場からして認められない。カントにとって有機体とは客観的に認識し得るものでも，また客観的なある自然の領域が与えられているものでもない。彼にとって有機体とは，ただ反省的判断力の理念なのである。それは，因果必然性の立場からしては全くの偶然に留まらざるを得ぬ有機体の組織を我々の理解のために，あたかもals ob自然の根底に目的因果が作用するかのように考え，偶然的なものの法則性Gesetzlichkeit des Zufälligen（K. d. U., § 76）換言すれば生命的なもののメカニズム即ち「目的なき合目的性」を樹立せんとする反省的判断力の原理に外ならない。美がそうであるように，有機体も反省的判断力の対象なのである。それ故自然の有機体は，機械因果の無限に続く系列

に対し統制的意味を与える理念たるに留まる。したがってヴィンデルバントのいうようにカントの所謂「批判的目的論は，機械論的な自然の説明の限界概念Grenzbegriff」[(7)]としての有機体概念に関係し得るに留まるのである。

2）シェリングの有機的自然観

さてシェリングは『判断力批判』から「限界概念」として受取ったOrganismusの意味領域を拡張し，それを世界構成原理にまで高めようとする。即ちシェリングは，第二の自然哲学的著作『世界霊について』（1798年）Von der Weltseele. の中でカントの「有機体とは，それ自体が原因であり同時に結果でもあるが如きものである」という定義を，新たに「有機的組織Organisationとは原因−結果の抑制された流れに他ならない」と書き改める（Ⅱ，349）。つまり流れが自然によって妨げられない場合にのみ，流れは（直線的に）流れ進む。流れが妨げられる場合，流れは（円を描いて）おのれ自身に立ち戻る(ebenda)。この円環をなす流れが有機的組織であって，原因−結果の無限なる直線的流れが自然によって妨げられる(＝有限化される）場合に成立する。まさにこのような有限性においてのみ，可視的精神としての自然は精神と同様無限なものとして理解される。原因と結果との限りなき直線的進行は全体としての世界においては思惟不可能なのである。むしろ全体としての世界は，結局一個の普遍的有機体　ein allgemeiner Organismus を目指し，同時にそれは機械論的世界把握の諸条件をも満たさなければならない[(8)]。つまり一切の有機的存在の諸段階が同一の有機的組織の漸次的展開によって形成されて行くのみならず，この同一の原理は無機的自然をも有機的自然と結びつけるのである[(9)]。

シェリングによれば一切の事物の本質は生命であり，自然における死せるものも消滅せる生命にすぎない。ゲーテの自然観を彷彿させるこの考え

は，シェリングによれば既に古代人によって「世界霊」Weltseeleという名称で暗示されていたものなのである。古代の自然哲学者が自然というプロテウス的本質として考えたエーテルを，シェリングは「自然の共通の魂」として考察する。彼は『世界霊について』の中で古代イオニアの自然哲学にならって，詩的直観による自然の哲学化の試みを行なっている。この著作の中でシェリングは古代の「世界霊」の仮説をそのまま取り入れている。即ちここでシェリングは，各個別的生命現象の帰納を通じて次第により高く登ることによって，究極の原理を仮説的に「世界霊」に求めたのである。ここに至ってようやく自然は，ひとつの独立した自律性をもって，シェリングの前に立ち現われてくるのである。

この傾向は，ロマン派に多大な好意をもって迎えられた『自然哲学体系の最初の企画』(1799年) Erster Entwurf eines Systems der Naturphilosophie. において一層顕著なものとなる。シェリングはここで自我からの自然の演繹的導出を完全に放棄したも同然である。[10] 世界霊の仮説の証明を彼は，自我の本質を自然へと移し入れることによって行なう。こうしてシェリングにとって初めて自然は精神と対応する実在性を獲得し，つまり自然は精神とパラレルな関係で規定されることとなるのである。R. ハイムの表現を借りれば，自我からの形式的にして先験的なる導出によって自然全体を説明する所謂「フィヒテ的演繹の試み」は，なるほど自然を思惟可能な限り最高の目的に関係させたが，しかし自然は自然外の目的に関係させられたのである。[11] 一般に実在的なもの（＝自然）を観念的なもの（＝自我）に従属させる先験哲学に対して，シェリングの自然哲学は観念的なものを実在的なものから，換言すれば精神を自然から解釈するのである(Ⅲ，272)。この自我からの演繹に留まり得ぬシェリングの眼差しは，自然をそれ自体において霊活的なものとみなす詩人の眼差しともいえるであろう。そしてこの自然はひとつの有機的生命なのであり，それ自体とし

て産出的なデュナーミッシュなものとみなされるのである。そのような自然をとらえる自然哲学をシェリングは，デュナーミッシュな「思弁的自然学」„spekulative Physik“ と呼んでいる(Ⅲ，274ff.)。この「一切の偉大なる創意の母」とも呼ばれるデュナーミッシュな「思弁的自然学」は，常に生成するものを対象とし，自然をその活動性Tätigkeitにおいてとらえ，自然をしてそのなすがままに活動せしめる。シェリングの所謂「自然について哲学するとは自然を創造することである」(Ⅲ，13) とは，この意味で理解されるべきものである。

もし経験Empirieが単に何か出来上ったものetwas Fertiges 即ち所産としての自然natura naturataと関係するにすぎないならば，デュナーミッシュな思弁的自然学はそれとも対立するであろう(Ⅲ，283)。というのは彼の思弁的自然学は主体即ち産出性としての自然natura naturansに関係するからである(Ⅲ，284)。単なる経験が，常に出来上ったものにかかわる反省Reflexionの立場と関係するのに対して，今や彼の自然学は，常に生成するもの或は産出性にかかわる直観Anschauungの立場と関係する(Ⅲ，286)。——ここに自然哲学期におけるシェリングの立場の変化が指摘されよう。それはとりわけ経験Empirie概念の変化に対応するものなのである。初期自然哲学において哲学を裏打ちし，哲学に実在性を与えた自然科学的《経験》は，今や単なる静観的反省の立場から規定されるのである。後期の自然哲学の立場を特徴づけるのが，シェリングの所謂デュナーミッシュな自然の観方なのである。こうしてデュナーミッシュな自然の観方は，なるほど経験的なそれではないが，しかし全く経験を離れた抽象的思惟であると考えられるべきではない。経験は，単なる静観的反省の立場に傾く時にのみ，デュナーミッシュな立場と対立するのである。

シェリングは，思弁的自然学の立場即ちデュナーミッシュに自然を観る立場は外面的，表面的なものに向けられる反省の立場ではなくして，自然

自体の内的なる機関に向けられる直観の立場であると述べているのである（vgl. Ⅲ，275)。このデュナーミッシュな直観は自然哲学における「知的直観」というべきものである。知的直観とは，シェリングの場合決して客観化されぬ自由な自我を唯一規定し得るものであった（Ⅰ，181)。同様に自然哲学の直観は，デュナーミッシュな産出的自然の生命と内的或は根源的に直接一体化するものとみなされるのである。自然のデュナーミッシュな純粋産出性及び根源的連続性は，「反省」に対して遮られるが，この「産出的直観」に対しては恒常的stetigとなり（Ⅲ，285ff.)，そのありのままの姿を現わすことができるのである。

2．自然から芸術へ

クローナーによればシェリングの自然哲学は美的観念論の先駆けであり，しかもそれ自体既に後者と同じ精神によって担われているのである。(12) しかしたとえ前者が後者の萌芽を自己の内に蔵しているとしても，その萌芽は自然の覆いの中で眠っていた。自然哲学において分裂せる反省の克服に従事し，デュナーミッシュな思弁的オルガンとして規定された《直観》は，それが《美的直観》ästhetische Anschauungとして姿を現わす所において，初めてその本来の活力を獲得するのである。たとえ1800年の『先験的観念論の体系』System des transzendentalen Idealismus. の成立以前にシェリングによってこのことがはっきり言明されることがなかったとしても，事実上「知的直観」は，彼の場合初めから「美的直観」として考えられていたのではなかろうか。——例えば一般にシェリングに帰せられている『ドイツ観念論最古の体系計画』(1796年又は1797年) Das älteste Systemprogramm des deutschen Idealismus. からは「理性の最高の働きが美的な働き」として考えられていたことが窺われるのである。(13) また丁度この頃，シェリングは『知識学の観念論の解明のための論文』

(1796/97年) Abhandlungen zur Erläuterung des Idealismus der Wissenschaftslehre. の中で，全哲学への入り口を示してくれるものが「美学」Aesthetikであると述べていることも注目に価する(Ⅰ，402)。同時代の自然哲学的著作においても，シェリングはしばしば生動的自然を解明する役割を詩情Poesieの中に認めている。彼によれば自然の象徴的言葉を見出だす純粋直観とは，詩情或は創造的構想力なのである(Ⅱ，47)。それ故シェリングの自然哲学における「自然について哲学するとは，自然を創造することである」という最終命題もまた，クローナーのいうように,「創造」という語が芸術家の創造とのアナロゴンとして諒解され，さらに芸術が『先験的観念論』におけるように哲学のオルガンにまで高められる場合に，その最終的承認を獲得するであろう。(14)

さてこうした自然直観から「美的直観」或は「芸術直観」へ向けての展開の必然性は次の点にあるように思われる。シェリングの「先験的観念論」は「自己意識のオルガンとして自然を演繹する」(Ⅲ，273) といわれているように，自我は，完全なる自己意識（＝自覚）に達するために直観しなければならぬ根源的同一性を，合目的的自然において現実に直観し得るかも知れない。しかしそれにもかかわらず自然及びその中に直観される同一性は，自我から独立したもの或は自我と異質的なもののように思われる。自我はその同一性をやはり自己自身のそれとして意識すべきなのである。したがってこのことが可能なためには，そこにおいて単に同一性が直観されるのみならず，自我自身がその同一性の根拠として直観されるような《自我の直観作用》が存在していなければならないだろう。シェリングの『先験的観念論の体系』を締めくくる所謂「芸術の哲学」の課題とは，まさにこの自我の直観作用を芸術直観Kunstanschauungとして明らかにすることなのである(Ⅲ，610ff.)。

「芸術直観」とは一面，表現された対象における主観的なものと客観的

なものとの同一性の客観的直観化，そして他面，その反映として，対象を直観する主観内部における主観的及び客観的活動の根源的調和化の活動であるということができる。シェリングによれば，この芸術直観の特有な働きを通じて，自我は自己自身を直観された同一性の根拠としてとらえると共に，同時に直観化された同一性のうちに，おのれ自身の同一性としての本質を直観するのである。こうした芸術活動のうちに示される自我の本質が芸術的「天才」Genieと呼ばれるものである。この問題を取り扱うのがシェリングの哲学の「丸天井全体の要石 Schlußstein」(Ⅲ，349) を形成するといわれた『先験的観念論』の最終章,「芸術の哲学」であったのである。

3．シェリングの天才論

一般にシェリングの『先験的観念論』は『判断力批判』を体系的に発展させたものであるといわれている。[15] 同様にシェリングの「天才」に関する叙述も，本来カントの「天才」論の拡張なのである。

さてカントにとって天才とは「芸術に規則を与える才能」(K. d. U.，§46) であった。しかしこの場合，天才において一体何を通じて芸術に規則が与えられるのか。その問いには「主観の諸能力の調和Stimmungを通じて」(ebenda) と答えられる。カントはこの「諸能力の調和」という概念のもとに「悟性の合法則性と構想力との自由なる一致における，自然で無意図的な主観的合目的性」(K. d. U.，§49) を考えているのである。こうしたカントの天才概念にみられる調和的関係は，シェリングの場合にも同様に存在している。シェリングにおいて芸術を産出する活動は，意識的にして同時に無意識的な活動である。したがって「芸術の所産は，意識的に産出されたものである点で，自由の所産と共通点をもち，無意識的に産出されたものである点で，自然の所産と共通点をもつ」(Ⅲ，612) のである。

芸術の所産は，自然及び自由の所産の両特性を自らのうちに合一しているのである。また次のようにも述べられている。「自然が無意識的に始まって意識的に終る」のに対して，芸術活動は「意識的に（主観的に）始まり，そして無意識的なもの或は客観的なものに終る」（Ⅲ，613)。つまり芸術は，その産出活動に関して意識的であり，所産に関して無意識的なのである。したがって今こうした芸術の所産を産み出す直観を考えてみると，そこにおいては無意識的活動が意識的活動を通じて，これと完全に同一化するまで働き通さなければならないだろう(ebenda)。

こうした直観を我々はいかに説明すべきか。例えば自由な行為においては，対立する活動は決して同一的になり得ないのである。というのは対立が解消すれば，自由の現象は止むからである。シェリングによれば「芸術的な産出活動は，その活動の初めにおいては自由であるが，これに反してその所産は自由な活動と必然的活動との同一性として現われるのである」（Ⅲ，614)。したがって芸術産出活動には，意識的活動と無意識的活動とが一致する点が存在しなければならないだろう。既にカントが芸術には「それ以上出ることのできない一つの限界が置かれることによって(芸術は)或る点で静止する」(K. d. U., §47) と考えていたように，シェリングもまた，かの「一致点が獲得されるならば，産出作用は絶対的に止まなければならない」(Ⅲ，614) と考えている。その結果，芸術の「産出者にとって更に産出を続けることが不可能となる」(ebenda) のである。なぜならすべての産出作用の条件は，意識的及び無意識的活動の対立であるが，しかし芸術活動の場合，「両活動は絶対的に合致し，一切の闘争が廃棄せられ，すべての矛盾が合一せられるからである」(Ⅲ，614f.)。芸術の所産の完成と同時に自由のすべての現象は取り去られる。それ故両活動の絶対的合一は，決して自由のせいにすることはできないのである。したがってその際「叡知Intelligenzは，かの合一によって驚かされ，恵みを与えられて

いると感ずるであろう。換言すれば叡知はこの合一を，いわば高次の自然の自由意志的恩恵freiwillige Gunst einer höheren Natur とみなすであろう」(Ⅲ, 615)。シェリングが「いかなる意識にも達し得ない不変なる同一者」とも呼ぶこの「高次の自然」は，——丁度運命が行為者に対してその意志に反してさえ目的を実現する力Macht をもつように—— 芸術活動の産出者に対して完成せるもの或は客観的なものを付け加える暗き，未知なる力Gewaltをもつのである(Ⅲ，616)。そしてシェリングは，自由の働きなしに，そしていわば自由に反して意識的なものに対して客観的なものを付け加えるこの不可解なるものを「天才という暗き概念」で呼ぶのである(ebenda)。

周知のように，既にカントもまた美なる芸術に対する才能に関して天才を「自然の寵児」Günstling der Natur (K. d. U., §47, §49) と呼んだ。カントにおいても「美なる芸術に対する天分は自然によって与えられる」(K. d. U., §47) のである。この場合いうまでもなく我々は「自然」という概念を，ホフマンも指摘しているように，「可能的経験の，法則的に結合された諸対象の総計（いわば所産としての自然）ではなくして，かえって主観を通じて働く産出性としての自然，つまり主観そのものの自然」[16]として理解すべきであろう。しかしカント自身そのことについて，ただ「主観の内なる自然」Natur im Subjekte (K. d. U., §46) 又は「主観の自然が，芸術に規則を与える」(K. d. U., §49, §57 Anm. I.) と述べるに留まったのである。

一方シェリングが「自然の恩恵」について述べる場合，彼は「自然」のもとで芸術家における無意識のうちに働く実在的な力，いわば芸術家の「根源的自己」Urselbst (Ⅲ, 615) を考えているのである。さらにシェリングに従えば，この「根源的自己」とは「意識と無意識との予定調和の普遍的根拠を含む絶対者以外の何ものでもない」(ebenda) のである。そ

れ故芸術家の「自然」言い換えれば「天才」が美学に対する関係は丁度，自我が哲学に対するそれと同じことになるのである(Ⅲ，619)。その結果シェリングは，こうした天才の所産としての芸術を「存在する唯一，永遠なる啓示であり，我々にかの同一的最高者の絶対的実在性を確信させずには置かない奇蹟である」(Ⅲ，618) というのである。

以上明らかなように「芸術は不可能なことに成功する」(Ⅲ，626)。即ち芸術は不可能とも思えた意識的と無意識的，観念的と実在的の各活動の対立の廃棄に成功するのである。しかしこのためには実は対立する両活動に共通し，両活動を同一化する或る能力が天才の中に存在していなければならない。「構想力」がこの驚くべき能力なのである(ebenda)。シェリングが述べているように，「根源的直観」つまり「産出的直観」produktive Anschauungは「第一ポテンツにおける創作能力」であり，それに対して我々が芸術的な創作能力と呼ぶものは，「最高のポテンツにおいて繰り返される産出的直観」なのであるが，この両者の中に働く同一のものが「構想力」なのである(ebenda)。したがって「産出的直観」においては，それが無意識的なそれであるために，後に意識の側で芸術家の創作能力として明るみに出る（構想力の）活動が「曇って（制約されて)」(Ⅲ，626) いたといえるのである。構想力は，芸術家の創作能力において初めて「意識をもって意識的及び無意識的活動の一致」(Ⅲ，349) を与え，我々をして矛盾するものをも思惟させ，総括させるのである(Ⅲ，626)。

4．詩情

カントの美的意味における「精神」(K. d. U., §49) と対応するものが，シェリングの「芸術における詩情」Poesie in der Kunst (Ⅲ，618) である。カントの「精神」とは元来，「人間に，その誕生に際して付与された守護的及び指導的なる精霊 Geist」(K. d. U., §46) であった。同様にシ

ェリングにおける「詩情」とは，ごく一般的にいって人間に本有的な「根源的活力」(Ⅲ，618) なのである。

さてカントの「精神」が「いかなる学術も教え得ず，いかなる勤勉も学び得ない」(K. d. U., §49) 才能であったように，シェリングの「詩情」は「学ばれず，練習によっても達せられないもの」(Ⅲ，618) なのである。したがってシェリングにおける「詩情」は，概念的な反省作用と相容れず，その結果天才の概念的,「意識的活動」と対立する。それ故我々は「詩情」を第一に「芸術の中に入り込んでくる無意識的なもの」(ebenda) の中に求めねばならないのである。シェリングによれば,「詩情とは，ただ自然の自由な恩恵によってのみ本有的となり得るものなのである」(ebenda)。にもかかわらず我々は第二に「詩情」のもとに，カントの「精神」が「美的理念の表現の能力」(K. d. U., §49) であったように，芸術家の「理念」(Ⅲ，618) と「測り知られざる深さ」(Ⅲ，619) とを導出する創作能力を理解しなければならないのである。したがって以上の二点より我々は，シェリングにおける「詩情」を，芸術家のうちに無意識的自然として作用する創作能力 (＝構想力) として解釈せざるを得ないのである。

シェリングの場合，芸術における「学ばれず，練習によっても達せられない」無意識的なものが「芸術における詩情」と呼ばれるのに対し，「意識的，反省的に実行され，教示され，学ばれ，伝統と練習とによって獲得され得る」(Ⅲ，618) 意識的活動は「芸術における芸術」と呼ばれる。シェリングはこの芸術活動の二要素の価値比較を次のように行なっている。即ち「芸術なき詩情は，いわば唯だ死せる所産を産出するのみであって，反対にむしろ芸術なき詩情よりも，詩情なき芸術の方が何かを為し得る」(ebenda)。というのは第一に「人間は本性上，詩情なきものは容易にないが，しかし多くの人は技術Kunstをもたない」からであり，第二に「偉大な巨匠の理念を辛抱強く研究しても，客観的な力の根本的欠乏を埋合せ

ることは不可能であるからである」(ebenda)。たとえその事によって詩情の仮象が，技術なしに成立し得るとしても，この仮象は，芸術家が彼の作品の中に入れる測り知られざる深さに対して，その浅薄さを示すだけなのである。詩情のみでは何事も為し得ないというシェリングの主張によって，天才の最内奥の本質が王位から追放される。カントもまた同じ矛盾に陥っている。

カントは趣味より天才（＝精神）の認められる芸術対象を才気あふれる芸術geistreiche Kunstと呼び，天才より趣味の認められる芸術対象を美なる芸術と呼んでいる(K. d. U., §50)。しかし彼の場合，明らかに芸術作品に関し「その理念において豊かで独創的」であることよりも,「美なる」ことが尊ばれているのである。というのはカントにとって天才の，無法則的自由における構想力の豊かさは無意味であったからである。それ故カントによれば趣味は天才の規律であり，天才の翼を切るのである(ebenda)。

しかしカントの述べていることをよく考えてみると，美的判断力に満足を与えぬ天才の所産は範例的ではなく，故に真の天才の作品ではないことが理解されるだろう。カントにとって本来の天才とは，まさに構想力と悟性との自由な一致なのである。ここにみられるカントの「天才」概念の外見上の矛盾は，オットー・シュラップがまさに正当に指摘しているように，この概念がカントによって二義的に使用されていたことから説明され得るのである。(17)

同様のことがシェリングの天才の二要素（芸術と詩情）にもあてはまる。即ち「一方が他方に優位性をもつのではなく，まさに両者の無差別 Indifferenz のみが芸術作品において反省されるのである」(Ⅲ，619)。それ故両者の「いずれが欠けても完成されたものは産出され得ない」(ebenda)。完成されたものは，両者の根源的同一性即ち両者を超越した天才によってのみ可能なのである(vgl. Ⅲ，618，619)。

以上シェリングの「芸術哲学」をカント美学の展開という観点から跡付けてみた。事実，そこには多くの共通する概念の構成或はカントからの発展的理念が認められるのである。『先験的観念論』における芸術の哲学は，まさしく「カント的意味における先験的美学なのである」[18]。

5．芸術と意志の自由

既にみてきたように，カントにおいて統制的意味をもっていた自然の合目的性の原理は，シェリングによって構成的原理へと高められている。つまりカントにとって自然の合目的性の原理は，理念であるにすぎず，それに相応するいかなるものも直観において客観的に与えられ得ない。それに対してシェリングの場合，この原理は自由の目的に適合する自然を構成し，主観に合致する客観を生産するのである。その結果，両者の美学理論には主として次のような差異が生じるのである。

カントは「美は道徳的善の象徴である」（K. d. U., § 59）と語った。この言明を，彼は美の主観的合目的性に関係する心意諸力の調和的関係を意志の自由に関連させることによって，基礎付けた。カントにおける趣味概念が我々に示すのは，自由における構想力が合法則性における悟性と一致し，趣味が類比を通じて実践的自由と合法則的自然との調和を思惟可能にするということである。それ故美は道徳の象徴として直観されるのである。なぜなら美は，その反省に際しての判断力の手続における類比を介して，直観的に表現不可能な理性理念へ間接的に移し入れられるからである（vgl. K. d. U., § 42, § 59）。

一方シェリングの場合，美は自由と自然，観念と実在，意識と無意識の調和そのものをただちに自己内に含むのである（Ⅲ，615ff.）。したがって彼において美は，「道徳の象徴」或は実践と理論との一致の象徴ではなくして，かえって構成的にこの一致そのものを意味していることになるので

ある。

ところでこの自由と必然，主観と客観，意識と無意識との根源的一致は，シェリングの実践哲学によれば「行為」つまり意志の限定或は意志と現象との合致において現われるのである（Ⅲ，605）。さらに意志が行為として現象するのは，外的対象においてであるといわれる（Ⅲ，557f.）。こうして純粋な実践意志は外的客体を要求することによって，実在性を獲得し，その外的客体において自己をいわばdokumentierenするのである。このことが起こり得るためには，その外的客体の表象がまず純粋意志の無限性の意識によって規定されることが必要であるが，次にこの表象は，外的世界内で可能な対象の表象として，必然的に有限者の限界内に属することが必要なのである。したがってこの表象は主観的で同時に客観的であり，無限的で同時に有限的であらねばならないのである。シェリングによれば，「無限者と有限者との中間を浮動する構想力」（Ⅲ，558）を措いてこの表象を産出するものはない。構想力の作用なくしては，道徳的意志は現実に（外的対象をもち，行為として）活動し得ない。構想力の媒介を通じて無限性（主観性）における道徳的意志は，有限性（客観性）へと引き戻され，現象可能となるのである。

ところでもし構想力の自由な産出作用が無限者を目指し，それによって「自由に奉仕する」（Ⅲ，559）とすれば，構想力はその本質に従って自由な構想力と呼ばれるのである。有限者内部に構想力によって現実化されるこの自由の働きは，まさに天才概念における自由と必然との綜合と同一のものなのである。ホフマンによればシェリングにおける天才の産出活動とは，道徳法則を満たすことなのである。[19] なぜなら芸術作品において自由と必然との合一が客観化され，道徳的行為の歴史的経過の中で繰返し空しく求められた有限者による無限者の現実化が一挙に実現されるからである。自由な行為に対して無限の進展の中に存するものが，天才の所産において

現前せるものとなるのである(Ⅲ，614)。

『先験的観念論』の冒頭での次のような言葉が思い起こされる。「哲学が把捉さるべき本来の感覚は美的感覚である」。哲学者の知的直観は「構想力の美的作用によってのみ可能である」(Ⅲ，351)。このように美的統一感覚をまず哲学の最も基本的な根拠とみなすところに，シェリングの『先験的観念論』がしばしば「美的観念論」と別称される所以があるのである。

シェリングによれば芸術家の美的直観とは，哲学者の知的直観が客観化されたものであり，そこにおいて自己意識の根源的同一性という哲学の永遠の課題が，現実に顕示される。また哲学者自身の知的直観が単なる主観的迷妄に陥らない保証として哲学者が求めねばならぬ客観性は芸術なのである(Ⅲ，625)。この意味で哲学者は芸術を哲学の唯一，真にして永遠のオルガンとみなす(Ⅲ，627f.)。これを用いて哲学者は，一般に自然と呼ばれる客観的世界を，秘密で不可思議な文字の中に隠された一つの詩として解釈し，その詩に精神のオデュッセーを認識するのである。また芸術作品は，哲学が一般に外的に呈示し得ぬもの即ち意識的なもの（＝無限者）と無意識的なもの（＝有限者）との根源的同一性を絶えず新しく記録することが可能であるが故に，哲学のドキュメントと呼ばれるのである(Ⅲ，627)。

この全哲学体系に対する芸術のドキュメント的性格は，こうして世界原理のÄsthetisierungを帰結する。ところがシェリングのこの所謂美的観念論の特性を徹底し，さらに絶対的同一性の観点から再構成したのが，同一哲学なのである。この基盤の上に立つ『芸術哲学講義』は，したがって絶対者の理念的美から説き起こされるのである。これとは対照的に今まで我々がみてきた『先験的観念論』では，美の実在的性格，美的直観の客観的性格つまり哲学体系に対する芸術のドキュメント的性格が強調されているのである。

さて我々は次のようにこの小論を結論づけることができる。

我々は本論文の前半で自然が主体或は生成する精神として捉えられた時，最もそれが産出的であることをみた。実はそうした自然のうちにシェリングは自由の秘められた痕跡を認めていたのである(Ⅲ，13)。今や我々は精神の自覚的発展の果てに，「自然の恩恵」と呼ばれる「天才」，言い換えればもうひとつの自然を認めたのである。（自然と精神の展開はそれぞれ逆の関係からお互いを求め合うのである。）

近代世界は人間が自然から身を振り離す時に始まるといわれている。にもかかわらず人間はまだ自然の他に自分の故郷を知らないのである(Ⅴ，427)。したがって人間は，まず自然的世界から離脱することによって自由を意識するが，彼本来の故郷に立ち戻るために再びその分裂を乗り越えなければならない。それ故人間が立ち帰るべき新しい自然状態は，かえって自由を通じて達成されるのである。この課題を達成するものが芸術なのである。芸術は人間の自由な行為でありながら，「我々に再び自然をもたらす」ことができるのである(Ⅴ，415)。

注

(1) Schasler M.; Ästhetik als Philosophie des Schönen und der Kunst, Berlin 1872, S. 822.

(2) Erdmann J. E.; Versuch einer wissenschaftlichen Darstellung der Geschichte der neuern Philosophie, Leipzig 1834—1853, Ⅵ, S. 141.

(3) Vgl. Nivelle A.; Frühromantische Dichtungstheorie, Berlin 1970, S. 36ff.

(4) ロマン派，特にFr. シュレーゲルが文献上『哲学年報』等を通じて早くからシェリングに関心をもっていたのに対して，両者が個人的な出会いをもったのは1798年8月ドレスデンにおいてが初めてであった。この出会いは簡単に全体を明らかにすることのできない長い前史をもっている。最初Fr. シュレーゲルは自然哲学期以前のシェリングを哲学のパルナソスにおいてフィヒテの直く後に置き，彼の『独断論及び批判主義に関す

る書信』(1795年) が彼の最良のものであると述べ (ケルナー宛書翰1797年1月), 彼をフィヒテの良き理解者として或は祖述者として捉えていた。しかしシェリングの最初の自然哲学論文『自然哲学の理念』を—ノヴァーリスはそれを好奇心をもって読んだにもかかわらず —Fr. シュレーゲルは好まなかった。この書物に対するシュレーゲルの不満は, (イエナのロマン派の中で最初に) シェリングと知り合ったノヴァーリスによってシェリング自身に伝えられた。即ち「率直に私 (ノヴァーリス) はシェリングに彼の『理念』に関して我々が不満であることを説明しました。彼はそれに同意し, 第二部〈出版されなかった〉において, より高い躍動を始めるつもりであると考えています。彼は私をとても満足させました。—彼の内なる真正な宇宙的傾向, 真の放射力がいわば一点から無限性へと外へ出て行きます」(Fr. シュレーゲル宛書翰1797年12月)。

我々が気付くのは, シュレーゲルの影響下にあったノヴァーリスがシェリングに対して非常に率直であったにもかかわらず, シュレーゲルは彼に対して好意的というより, むしろ敵対していたということである。したがってフールマンスの指摘しているように「シェリングとシュレーゲル一派との結びつきは過大評価されるべきでない」(Schelling. Briefe und Dokumente, herausgegeben von H. Fuhrmans, Bonn 1962, I, S. 155.)。事情はシェリングが1798年8月にドレスデンを訪れ, シュレーゲルとの出会いがあってからも変りはなかった。いやむしろシュレーゲルの側ではシェリングに対する隔りと批判とが段々大きくなっていった。

(5) Kroner R.; Von Kant bis Hegel, Tübingen 1924, II, S. 11.

(6) 機械的因果の範疇によって構成された自然の所産が, 内面的合目的性 (又は判断力) の立場から, 自由に産出する意志的立場において観られ, 目的を根拠とする自然目的 (有機体がその例) となる。ここに必然と自由, 自然と意志との結合がなされ, 批判哲学が一つの体系として完成される可能性が生じる。

(7) Windelband W.; Lehrbuch der Geschichte der Philosophie, Straßburg 1891, S. 486.

(8) それに対してカントの場合全体としての自然は一つの理念であるが故に, 内面的合目的性の成立する可能性も, 自然の内包的全体にではなく, かえ

って外延的な個々の自然，しかも有機体に限られ，機械論的自然は除外された。さらにこの可能性を直ちに現実とみなすことは，批判主義の許さざる所であった。

(9) 既に『自然哲学の理念』の『序論』においてこれと類似した考え方が「全体としての自然の絶対的合目的性』(II，54) の中に窺える。ただその場合，問題はカントの力学的，目的論的な自然の説明を「自我の本質から一層深く基礎付ける」ことに留まっていた(vgl. Haym R.; Die romantische Schule, Berlin 1870, S. 597f.)。

(10) Haym R.; a. a. O., S. 598.

(11) Haym R.; a. a. O., S. 598.

(12) Kroner R.; a. a. O., S. 43f.

(13) Schelling; Systemprogramm. in: Zeltner H.; Schelling, Stuttgart 1954, S. 66.

(14) Kroner R.; a. a. O., S. 44f.

(15) Kroner R.; a. a. O., S. 43.

(16) Hoffmann K.; Die Umbildung der Kantischen Lehre vom Genie in Schellings System des transzendentalen Idealismus, Bern 1907, S. 54.

(17) Schlapp O.; Kants Lehre vom Genie und die Entstehung der „Kritik der Urteilskraft', Göttingen 1901, S. 334. ——カントは天才のもとで芸術に規則を与える範例的，独創的な才能を諒解した。けれどもカントが想像力の放埒 Ausschweifungen der Imagination に対して「趣味」を提出する際，具体的には彼は Sturm und Drang の「大天才」Kraftgenie を考えていたようである。

(18) Hoffmann K.; a. a. O., S. 40.

(19) Hoffmann K.; a. a. O., S. 44.

(大学院学生)